

パウリ氏の心理學現狀論

岩井勝二郎

實驗心理學は、フエヒテル、ヅント以來自然科學と等しく、精密科學ならむことを努めたのであるが、今日いままほ其の地位を獲るにいたらぬのは何に本くのであらうか。

パウリは方法の上より、理論の上より、更には一般法則の不足の上より、この現狀を説明した。

第一、今日の心理學的實驗は、その適用の範圍も、證明力も共に不充分である。近來論争の中心となつた組織的實驗的内省の問題がその適例である。企圖的に生起せしめた思考過程を其の直後に記述し、これを用ゐて思考作用を説明しやうとする試みは萬人の承認を得るにいたらず、又當初豫期したほどの進歩も來してゐない。其の外、注

意及び意識の範圍を實驗的に測定せむとし、感情經過と身體的伴隨現象との間に一義的の相依關係をたてむとする企ても成功することは出來なかつた。あらゆる心理學の標準的認識源をなすものは内省であるから、其の理論が立ちてはじめてこれら方法上の問題は解決されるべきであるが、この根本を欠いて、枝葉のみにはしることが不満足な現狀を來した主なる理由である。

第二は理論上の問題であるが、元來、主觀的事實の解釋にはいろいろな見解がたてられるので、就中、生理學的解釋と心理學的解釋との對立の可能の如きは其の適列である。

懷中時計の音の如き微弱な刺戟の場合にみられ

る様な無感覺的時期は、注意の動搖としても、又感官の状態變化としても理解せられる。エーベル氏法則の場合に於ても同様である。こゝに心理學的現象には常にこれに伴隨並行する生理學的現象の存在を假定すべきものとする限りは、前者の概念は後者の概念の下におさめられ従て心理學的現象の伴隨の有無に拘らず、これらの事實は皆生理的事實に從屬するものといはれ得るのである。

理論的見解の相反對する他の事例は一經驗の特性の單純、複雑に關する問題である。空間知覺に就いて、生得説では、これを原本的な、それ以上還原すべからざる意識内容なりとするに對し、經驗説は、以是種々なる感覺や知覺の融合なりとする。

これと密接に關連して次には心的單位の數及び屬性の問題がある。これに本いて、聯想心理學、統覺心理學乃至は作用心理學の論争がある。右の

兩者は感覺と其の記憶像とのみを以て足れりせず、更に特殊の要素的な感情、注意、意志、乃至は思考過程をも假定する。かの無意識的精神過程又は傾向に關する論争亦これに屬する。

心理學の理論的方面のこの不一致は何に本くのであらうか。

今日、理化學の示す偉大なる結果は、ひとり、實驗的方法のみからは理解せられくもない。他方更に、理論——精確にいへば數理——と實驗との理念上の關係からもみられねばならぬ。理論は實驗上の結果を一般的の假定から誘導し、實驗は屢々理論的假定の當然の歸結を與へる。マックスエル氏公式をヘルツ氏の實驗が實證した如きは、かゝる相互關係の好適例である。軌近理化學の偉大なる結果は多くはこゝにいふ相互關係の賜養ともいふべく、近くは電子論上大切なる意義を保つツエーマン氏効果の發見、物質構造上の特殊な假説と

關係あるX線の本性に就いてのラウエ氏の實驗の如き又適例たるを失はぬ。

生物學も亦精密的自然科學と同様であつて、植物學も動物學も解剖學も、單純に經驗上の研究のみでは足らず、進化論を俟ちてはじめて統一的なる理論上の根據を得たのである。心理學の現状はいろいろの點で生物學の初期に類してゐる。

理論上の見解は、多くは、心理學上自家固有の結果より來らずして、他の哲學的學科、論理學、認識論及び形而上學より假用する。エーベル氏法則の精神物理學的解釋の如き、又はゾントの心理學及び哲學に於ける感情や意志の役目の如き、齊しくこの種の古典的好適例である。

これ等の事實に對して、心理學は、自家固有の理論的學說を建設せねばならぬ。かゝる理論心理學の任務は、種々なる心理學上の學說及び其の中に含まれる説明原理を組織的に加工改造して連關

と誘導との本來の目的に叶ふ様にすることであらう。

か様な方法上及び理論上の難點と並んで更に第三の困難なる事情ともいふべきものは、今日の心理學には、エネルギー不滅の法則又は生物發達の根本法則の如き、包括的な法則を欠くことである。當初エーベル氏法則やフエヒネル氏公式にかけられてゐた希望は、満足せらるゝにいたらず、爾來新なる實驗的研究はみな新なる規則性をもたらした。しかもその妥當範圍は多くは狭小さなくとも疑しいものであつた。それから類似の事實へ類推しやうにも、一々の場合の條件の複雑なるために多くは不可能に了り、さなくとも、たゞ多くの留保條件の下にのみ營まれ得るに過ぎぬ。

記憶研究の如き適例である。被験者の異なるに從て、個人型の異なるに從て更には材料やその瞬間の傾向に從ひ、其度毎に結果は別個のものとな

り、しかもこれらは器械的記憶に對してのみに妥當なるにすぎず、從て、自然的記憶を理解する上には寄與するどころ一層僅少である。

かゝる心理學獨特の地位は一部分は其の取扱ふ對象の本性にも基くといへ、他方又その原因は研究相互間の内面的連關の缺乏にあるや勿論である。

吾人は屢々新來の問題のために舊來の問題を正當に扱ひ、求むる事實材料を完成することを忽せにするのであるか近代心理學の劈頭に立つたエーベル氏法則の事實の如きは、その著しき事例である。今日にいたりて、なほその妥當範圍や解釋の定まらぬは、第一には、剴切なる研究を欠くことによるのである。

要之、心理學が内面的に閉合完成した經驗科學として獨立するにいたる過程は今日はなほ未だ完結してゐないことは明である。

右はパウリ⁽¹⁾が其著心的合則性論の第一章、心理學現狀批判の大意であるが、以下章を追うてエーベル氏法則の問題、並にそれに連關した事柄を取扱ひ、この研究の現狀を明にし、これによりて心的合則性の問題をとかむとしたのである。

此はエーベル氏法則の解釋に就いては、生理學的解釋の至當なるべきを認め其の妥當の範圍を擴大し、ひとり感覺、知覺の範圍に止らず、更に記憶表象の方面にも及ぼし、同時にこの法則を廣義に解して、主觀的量は、其の關係する變量に從ひ當初は迅速に、次に著しく遲滯して、つひに限界量にいたるとなし、これを相對性律とよび、心的合則性中、重要な役目をなすものなりとした。

實驗心理學者が一方、具體的材料の蒐集の上に銳意工夫を凝らし、その方法手續に於て、益々精密剴切ならむことを期すべきと共に、他方、いはば抽象的とも見るべき統一的綜合的見地の確立の

方面にも、不斷の注意を拂ふことを忽諸に附してはならぬ。近時、かやうな點を力説する學者の漸く多いのは或は良、もすればこの方面を忘れ勝ちな時弊への一反證ともみられるのではあるまいか。

材料に趨るものは、理論を忽にしやすく、組織化に偏するものは内容を問ふに暇なしとみゆる場合が多い。この際パウリが特に、理論と實驗との連關に科學發達の中心條件を認めたのは、何等新奇な定言ではないまでも、時弊に中るといふ意味で傾聽に値しやう。

近頃の文献で、リンドブルスキイ⁽²⁾が理論的心理學に對して叫ぶところが、これと同一傾向を示すものとみられて、興味がある。

(大正十一年十一月二十一日稿)

- (1) R. Pauli, *Über psychische Gesetzmässigkeit*, insbesondere über das Webersche Gesetz, Jena, 1920.
 (2) J. Lindworsky, *Umrisskizze zu einer theoretischen*

Psychologie, Zeitschrift für Psychologie, Bd. 89, Heft 4-6, s. 313ff.